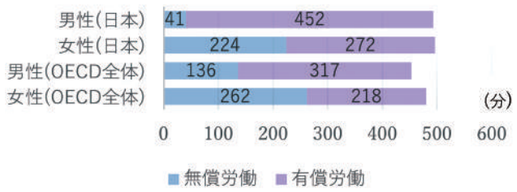
数字で考える 男性にとってのジェンダー問題

「夫は外、妻は家庭」という性別役割分担意識に反対する人の割合は、男女ともに賛成する人を上回っていますが…

生活時間の国際比較

男女別に見た生活時間

(週全体平均、1日あたり)



※無償労働…家事、育児、介護、買い物、ボランティア活動など
※有償労働…仕事、通勤・通学、授業・学校での活動など

OECD(経済協力開発機構)が2020年にまとめた生活時間の国際比較データ(15～64歳の男女を対象)における日本の状況

男性の有償労働時間　452分
無償労働時間　41分

＊有償労働時間の男女比⇒男性は女性の1.7倍
＊無償労働時間の男女比⇒女性は男性の5.5倍

＊諸外国と比較して
○男性も女性も有償労働時間が長いが、男性は極端に長い。
○無償労働が女性に偏るという傾向が極端に強い。
○男女とも有償・無償をあわせた総労働時間が長く、時間的にはすでに限界まで労働している。

［内閣府『令和2年版　男女共同参画白書』］

家庭生活への男性の参画

家事関連時間

男性 51 分
女性 3 時間 24 分

※家事、介護・看護、育児、買い物の時間を含む、1週間での1日あたりの平均時間
［総務省統計局「令和3年社会生活基本調査」］

＊男性の家事関連時間は増加傾向。男女差も縮小しているが、依然として差は大きい。

＊6歳未満の子供を持つ夫・妻の家事関連時間⇒夫は1時間54分(家事：30分、育児：1時間5分)、妻は7時間28分(家事：2時間58分、育児：3時間54分)

育児休業取得率

男性 13.97%
女性 85.1%

［厚生労働省「令和3年度雇用均等基本調査」］

＊男性の取得率は過去最高を更新したが、政府目標は「2025年までに30%」

＊内閣府「男女共同参画社会に関する世論調査」(令和元年11月公表)⇒20～30代の男性の7割以上が、育児を「配偶者と半分ずつ分担したい」と希望

同居する主な介護者の性別

男性 35.0%
女性 65.0%

［厚生労働省「国民生活基礎調査(令和元年)」］

＊介護の担い手として義理の娘の割合が低下する一方、夫・息子(特に息子)の介護者が増加

＊総務省「就業構造基本調査」⇒平成28年10月～平成29年9月までの1年間で、家族の介護や看護を理由とした離職者は約9.9万人。その内の75.8%が女性

男性の育児参画を阻む壁

家事・育児に関する役割分担については、若い世代の男性ほど妻と半分ずつ分担したいと希望していますが、現実にはできていません。

こうした現状の背景として、男性に多くみられる長時間労働の問題、職場や周囲の理解不足などに加え、男性が育児に参画しにくい慣行や環境等があると考えられています。

○男性が家事・育児のために帰宅することに、理解のない同僚がいる。
○幼稚園・保育園などが、母親だけに連絡事項や子供の様子を伝える。
○PTAや学校行事に参加するのは母親ばかりで、父親が行きづらい。
○公共交通機関や商業施設等の男性用トイレにおむつ交換台やベビーチェアが設置されていない。　など

［内閣府「仕事と子育て等の両立を阻害する慣行等調査」］

▲今年度開催した『プレパパ・パパの子育て講座』の一場面。「仕事と子育ての両立は永遠の課題」といった声も…。

性別による無意識の思い込み（アンコンシャス・バイアス）

性別役割に対する意識

「そう思う」+「どちらかといえばそう思う」の合計

男性　上位10項目		%	女性 順位	%
1	男性は仕事をして家計を支えるべきだ	48.7	1	44.9
2	女性には女性らしい感性があるものだ	45.7	2	43.1
3	女性は感情的になりやすい	35.3	3	37.0
4	デートや食事のお金は男性が負担すべきだ	34.0	8	21.5
5	育児期間中の女性は重要な仕事を担当すべきでない	33.8	4	33.2
6	女性はか弱い存在なので、守られなければならない	33.1	6	23.4
7	男性は結婚して家庭をもって一人前だ	30.4	※	17.9
8	男性は人前で泣くべきではない	28.9		17.6
9	女性は結婚によって、経済的に安定を得る方が良い	28.6	5	27.2
10	共働きでも男性は家庭よりも仕事を優先するべきだ	28.4	7	21.6

※女性の上位10項目外

性別役割についての意識・経験

意識：男性 23.6%　　女性 17.7%
経験：男性 20.7%　　女性 26.5%

※意識：測定41項目について、各項目「そう思う」+「どちらかといえばそう思う」の回答率の41項目平均(%)を男女別に算出したもの
※経験：性別に基づく役割を「直接言われた」あるいは「言動や態度から感じた」経験の回答率の41項目平均(%)を男女別に算出したもの

内閣府男女共同参画局が行った「性別による無意識の思い込み(アンコンシャス・バイアス)」に関する調査結果

＊男女ともに上位に入った8項目のうち、7項目で男性の割合の方が高い。

＊男女差が大きく開いたのは次の3項目
○デートや食事のお金は男性が負担すべきだ
○男性は結婚して家庭をもって一人前だ
○男性は人前で泣くべきではない

＊全項目平均では
○性別役割の「意識」⇒男性が強い。
○直接言われた・言動や態度から感じた「経験」⇒女性の方が多い。

※無意識の思い込み(アンコンシャス・バイアス)…誰もが潜在的に持っている思い込みのこと。

［内閣府男女共同参画局『令和4年度　性別による無意識の思い込み(アンコンシャス・バイアス)に関する調査研究調査結果』］

男性の孤独死・自殺

東京都23区における孤独死数（令和元年）

男性 3,868 人
女性 1,686 人

［東京都「東京都監察医務院で取り扱った自宅住居で亡くなった単身世帯の者の統計」］

令和3年の自殺者数

男性 13,939 人
女性 7,068 人

［厚生労働省「令和3年中における自殺の状況」］

＊令和元年の東京都23区における孤独死数⇒男性が全体の約7割

＊令和3年の自殺者数⇒男性は女性の約2.0倍。要因に「孤独感」がある自殺者は、男性の方が多い。

＊内閣府「平成30年度高齢者の住宅と生活環境に関する調査」⇒近所の人とのつきあいの程度をみると、いずれの世帯形態でも、男性の方が女性に比べて「親しくつきあっている」「あいさつ以外にも多少のつきあいがある」と回答する割合が低い。

Toxic　Masculinity
「有害な男性性／有害な男らしさ」

「有害な男性性」「有害な男らしさ」などと訳されるこの用語は、男らしさそのものが有害ということではなく、「自他に悪影響を及ぼすような男性性のあり方や男性性へのこだわり」「自他を害する過剰な男らしさへの執着」などを意味するとされ、1.感情の抑圧／苦悩の隠蔽　2.表面的なたくましさの維持　3.力の指標としての暴力の3つがあげられています。
他者に有害なだけでなく、こうした呪縛により自らストレスを抱え込んでしまうこともあり、男性による暴力・ハラスメントや自殺率の高さの原因として言及されることがあります。

今年度実施した講座『ダイバーシティ時代の「男性問題」～ジェンダー平等のために「男性」は何ができるのか～』(講師：川口遼さん)でも取り上げられました。

女性への暴力をなくすための男性の取組
ホワイトリボンキャンペーン

ホワイトリボンキャンペーンは、性暴力、DV、セクハラなど様々な女性への暴力に対して、暴力を振るわない男性たちが"自分には関係ない"とはせず、主体となって撲滅をめざす活動です。現在、50か国以上に広がっており、「フェアメン」を増やすアクションを展開しています。

○「フェアメン」とは
身近な人々に対して、常にフェア(対等)な態度で接し、暴力を決して「振るわない」「許さない」ことを誓い、社会にある暴力に「沈黙しない」、ポジティブな生き方を次世代に示し、行動する男性のこと
○フェアメン3カ条
1.耳を傾ける　2.暴力に訴えない
3.相手も自分も大切にする

※ホワイトリボンキャンペーン・ジャパン　https://wrcj.jp/ より